

(歌舞伎の口上のように、「ぐぶしをつけて」
抜けばゝ処女散るうゝ、オホりの刃ゝ。
(二二)まで)

「今宵」ご覧に入れまするはドスケベ落語、陰差荒ぶる淫らな夜の剣戟譚——

「ご案内申し上げます、勃て川精子でございます。お気軽に『せいこ』ちゃんと呼びください。」

くれぐれも『せいし』ちゃんとは呼ばないでください。どちらかという卵子でございます。以後お見知り置きを。

さて、私が座礼した際ちらりと覗いた胸の谷間に、皆様ひとつ執心のようですがご安心ください。サゲの後にもう一度ご覧頂くことができます。

スケベは悪いことではありません。今宵は剣戟譚ということで、高座の私からは、皆様がいきり立つた野太刀を携えたモノノフに見えております。

ええ、皆様血気盛んなモノノフです。いずれも立派な得物を構えておられる…野太刀、

野太刀、一本飛ばして野太刀。

失礼しました。野太刀、野太刀、小太刀、野太刀。

刀は大小ではありません。奥まで届くとかいいところに当たるとか、そんなのは些末な事なのです。

モノノフの皆様よろしいですか。大切なのはこう、ローションガーゼでじゅっぽじゅっぽと磨き上げたとき、ビクンビクンと活きのいい反り返りを見せるか！

それだけが重要なのです。この反り返りこそが！日本がまだ負けていないという証に他ならないのです。大和男子の皆様誇らしき一振り、今一度磨いてみてはいかがでしょうか。

枕もそこそこにして、早いところ嚟をおつ始めてもいいんですが、江戸っ子たるものが短くつちゃあ粋じゃない。火事とけんかは江戸の華、江戸っ子の燃え上がるときは一瞬ということですね。

ただ私、皆様と少しばかり悠長に仲を深めていきたい所存でありまして、見渡す限りどうやら皆様もサクッと抜かれるよりは、ねっとりじっとり焦らされるほうが好きそうな面構えをしておられます。

えーと左からマゾ、マゾ、マゾ、マゾ、マゾ、マゾ、筋金入りが勢ぞろいでございますね。皆様方の寸止め汁を束ねて放てば火も消せることでしょう。

私、モノノフの如き野太刀こそ携えておりませんが、嚟家ですからこの舌と言葉を磨き上げております。

自己紹介がてら皆様と言葉を交わしまして、高座と客席に橋渡しをしたく存じます。題しまして『抜けばマゾ散る言葉の刃』。

難しいことはありません。皆様方の下世話な質問あるいは相談をお題として頂きまして、僭越ながら私、めが一刀両断、ズバッと解答致します。

では早速、挙手にて募りましょう。はい、そちらのマゾの方。

ああ失礼、そちらの寝取られ顔のマゾの方。

ふむ……近ごろ妻が口を利いてくれません。稼ぎが頼りないのは承知のうえですが、理解のうえで結婚してくれたはず。食卓での会話もまばらになり、同じベッドで寝ていても、朝になると妻は顔を背けて眠っている。

なんとか妻との関係を持ち直そうと、好きだったお菓子屋さんでケーキを買って帰ったある日、妻がテーブルに置き忘れたスマホに知らない男からのメッセージ通知が…『今晚空いてる?』

私はどうすればいいのでしょうか。ちなみに今勃起しています。

はい、ご相談まことにありがとうございます。いまチエス……！

失礼、大きな声が出てしまいました。教科書に載せたいくらいの美しい寝取られでございますね。テストには作者の気持ちを答えよとの問題が出ますがサービス問題です、確実に得点するように。

察するに奥様はともとお美しい方なのでしょう。かつての遊び方は情熱的かつ煌びやか、ゆえにあなたの保守的な生活感に徐々に退屈し始めていると。どうすればいいのでしょうか。お答えしましょう。

ド・スケ・ペー！セー……ックス……！

それ以外ありません。皆様はすべからくモノノフでございます。

他人棒に屈したメスまんこは、より強力なオスちんぽによって上書きするしかないのです。脳を焼いている場合ではありません。寝取り男のチャラついた前髪を焼き払うです。

寝取られは悪です。許してはならないのです。

ピストンに際しましては一突きごとに悪・即・斬と唱えますと、より成敗してる感が出てグーでございます。では続いてご唱和を。

悪・即・斬！悪・即・斬！

モノノフどもよ、全くもって皆様はカスでございます。気合いが足りておりません。仁王立ちにてアナルに力を込めなさい。

悪・即・斬！

まだ足りません。では私もこのように太ももをならけ出しまして、手のひらでパンパンと、さながらメトロノームの如く音頭を取りましょう。

(パンパンスタート)

ほら、皆様は愛するメスまんこに雄々しき肉棒を打ち込んでおります。

ひつくいオホ声が聞こえるようではございませんか。

(リズムカルに)

っ♡ っ♡ っ♡ っ♡

おお おお おお おお

悪・即・斬！ っ♡お
悪・即・斬！ っ♡お

おお お

っ♡ っ♡ いべ♡ いべ♡
すき♡ すき♡ むり♡ だめ♡

悪・即・斬！ っ♡お

いべ♡ いべ♡ もう♡ むり♡

奥♡ 奥♡ もっと♡ 突いて♡
悪！ っ♡ 即！ おっ♡ 斬！

おっ♡♡♡♡

おお

(ここまで)

(パンパン終了)

特濃モノノフザーメンを出し切りしましたら、しかと抱きしめてあげてください。
優しく愛を囁くまでが、残心でございます。

次の方、挙手にて承ります。おや、大入りですね。

お時間の都合であとお一方だけ…はい。そちらのマゾの方。

失礼、優しくいじめられたい甘ったれ系マゾの方。

ふむ…陰キャオタクなので、クラスの一軍女子から酷い扱いを受けています。

例えば放課後、校舎裏に呼び出されては、『オタクくん危機一髪』と称して順番に手コ

キをされ、射精してしまったときに手コキをしていた女子に、罰ゲームとしてベロチュー
されています。

他にも喘ぎ声の練習台として、両耳から嘔喘ぎを吹き込まれたり、乳首開発の実験台
として、キラキラしたネイルで一生カリカリされたり…

もう耐えられません。僕ってどうすればいいのでしょうか。

ちなみに「カリ」という言葉を聞くだけで乳首とちんちんが反応してしまいます。

えー、甘ったれマゾさん、カリがとうございました。毎日ギャルに絞られておっカリで
しょう。

今の立場に甘んじるおつもりであれば、青酸カリのイッキ飲みをお勧めするところで
したが、あなただってカリにもオスであるならばと一念発起してお手を挙げたようでご
ざいますので、お力添え致しますカリ。

・カリ？ いかがいたしましたカリ？ 何かおかしいことを申し上げていますでしょうか。
カリ。

私^{わたくし}、勃^{はつ}てカリ精^{せい}子^こ、嘶^{はみ}家^かリでございます。

趣味は芝刈り、好きな食べ物ばかりんとう、生まれ育ちはカリブ海^か。借^かり家^や暮^ぐらうして
彼^{かれ}氏^し募^も集中^{しゅちゅう}であります。

曰^{いは}ごろストレスでカリカリしてばかりの皆様^{さん}にカリをお届けすべく、カリもカリして
カリないうちに、カリのカリ力をカリカリにして差し上げた^くくチェスト……！……！

失礼^{しつれい}。チェストが出てしまいました。

えー嘶^{はみ}家^かというの^は因^{いん}果^がな商^{しょう}売^{ばい}でして、落^{らく}語^ごつて色んな人間^{にんげん}をこの身^み一つで演^{えん}じます
でしょう。言^いつてしまえば憑^よき物^{もの}を宿^{しゆく}す身^みですから、呼^よんでないのまでつい寄^よってきてし
まう。まったく迷惑^{めいわく}つたらありやしないカリ。

あーっ。

カーリカリカリ！この体は頂^{いただき}いたカリ！聞^きくがいいオタクどもー！

高座^{こうざ}は終^{しま}わりカリ！今^{いま}からはカリのカリによるカリのためのカリカリパラダイスが
始^{はじ}まるカリ！さあ乳^{ちち}首^{くび}とちんぽを差^さし出^ですカリよ……ちよ、あつ、痛^{いた}つ、あ、いだいつ！

これ貴^{あなた}様の体^{てい}だぞ、こうなつたらおっぱい放^{はな}り出^でしてやるカリ！

いつつ、ちよ、やめてっ！扇^{あふ}子^こでみぞおちズクズクするのやめてっ！

あつ、何^{なに}をするカリ……♡ 扇^{あふ}子^こをそんなところに突^つ込^こむでないカリ♡

私^{わたくし}の斬^き脛^{せう}剣^{けん}に斬^きれぬ膺^{よう}はありません。心^{こころ}頭^{あたま}滅^{めつ}却^{じやく}すればガシマンもまた涼^{すずし}し！

♡ ちよ、ダメ♡ オタクどもが見^みてりゅ♡ ♡ だめっ♡ ♡ ♡ ♡
だめ♡ いべ♡ いべ♡ いっ……べううううっ♡♡♡

ふう…またつまらぬものを斬^きつてしまいました。ヤドカリというのは外^{そと}からの攻^{こう}撃^{げき}に
はカ^かラで身^みを守^{まも}ります。弱^{よわ}いのは中^{なかに}でございますから、こうするの^が一番^{いちばん}の悪^{あく}即^{じやく}斬^{ざん}とい
うわけですね。

解^{かい}答^た遅^{おそ}れまして申し訳^{わけ}ありませんが、見^みておわか^わかりの通^とりでございます。

ドスケベセックスです。太^ふくて固^{かた}い棒^{ぼう}で突^つかれて、負^まけないまんこはありません。

おや…甘^{あま}ったれマゾさん、何^{なん}やら白^{しろ}目^めを剥^はいて痙^{けい}攣^{れん}していらっしやいますね。周^{まわ}りのマ
ゾの方々^{さん}も、お股^こから何^{なん}やら白^{しろ}いもの^がトロトロと……ふふ♡

オスどもが揃^{そろ}いも揃^{そろ}つて情^{なさけ}けない。なるほどここ^こがカリオスト口^{くち}の城^{しろ}、というわけだ
ね。私^{わたし}は大切なものを奪^{うば}つてしまいました。皆^{みな}様の精^{せい}子^こです。

快^{かい}刀^{とう}乱^{らん}麻^まを断^きつ一^{いち}撃^{げき}、勃^{はつ}て川^{かわ}精^{せい}子^こでございます。

えー火^ひ事^じと喧^{けん}嘩^かは江^え戸^どの華^はと言^いいますが、江^え戸^どの粋^粋といったら花^{はな}火^ひは外^{そと}せない。

時^{とき}は江^え戸^どの中^{なかに}頃^{ころ}、蟬^{せみ}の声^{こゑ}もやかましくなってきた頃^{ころ}合^あい、西^{せい}国^{こく}橋^{はし}のたもとに人^{ひと}がわん
さかと集^あま^まつておりまして。

(セリフにキャラ名の指定がないときは、特に誰というわけでもないモノの語りです)

「なんだい今日は、橋が中折れしそうなくらいの人出だねえ」

「知らないのかい、今日は、川開きだよ、両国の川開き」

「まあ、そりゃあ助平だねえ。何かい、みんなして川辺にずらりと並んで、大胆にこう…ガバっと」

「バカ野郎、そりゃ両足の股開きだ。両国のか・わ・び・ら・きー」

この川開きってのが、ただの川遊びの解禁じゃございません。

もとは享保十八年、八代將軍・吉宗公の時分、江戸で大飢饉がありまして、疫病が流行りに流行った。それを鎮めようってんで、隅田川で水神様に祈禱をして、それと一緒にドーンと花火を打ち上げたのが始まりってわけです。

「へえ、花火で疫病退散とは、江戸っ子も洒落てるじゃねえか」

「洒落てんのはそれだけじゃねえ、花火の勝負つてのがまた粋なんだよ」

当時は花火師の鍵屋と玉屋、この二つが競っておりまして、今でいうところのライバル会社、いやもつとたちが悪い、火薬の煙で目がくらむほどのチンコ勝負、失礼、ガズンコ。勝負を繰り広げていました。

物好きどもが日の暮れる前から川辺に陣取って、さあさあ待ちに待った祭りの始まり、ヒュルルル、……ドーンッ！「たーまやー！」「かーぎやー！」と屋号を呼ぶ声が夜空に響きます。

「おい、さっきのは鍵屋かい？」

「いやあれは玉屋だ、光の広がりが違うんだよ」

なんてな具合に、花火にうるさい旦那衆がうんちくを垂れながら、屋台で団子やたばこをくわえ、子どもは風車なんか回して、娘さんは浴衣姿でうちわをパタパタ。

そんでもって花火はというと、今みたいな色とりどりの大輪の花つてわけじゃなくて、当時は昇りものや仕掛け花火が主流でしてね、滝のように火花が流れたり、鳥や獅子が火の粉で浮かび上がったたり。

「おい、火の粉が降ってきたぞ」

「そりゃそうさ、江戸っ子は火薬の匂いで夏を知る。夏の昼は長いが夜もまた長い。」
「献どっだい」

・なんてこと言つてゐるうちに、川面^{かわも}に映る花火がドーンと一発。

「おお、こいつあ縁起がいいやー!」

……てなわけで、江戸の花火つてのは、単なる見世物じゃなく、暮らしの中の季節の節目、厄を払つて粋に遊ぶ、大事な行事だったわけです。

今年の川開きも大勢詰めかけまして、花火の上がる前から屋台や出店で町中活気づいておりました。

たがや

「なんだい、えらくぐつた返してるじゃねえか。勘弁してくれよ。こつちや仕事終わりで疲れてるのによ。おう、通してくんな、家があつちなんだ。おうすまねえ、いてつ、誰か足踏んづけやがつたなこんちくしょう!」

町人△

「悪いね、おお、たがやさんじゃないか。涼みに来たのかい」

たがや

「てやんでい、べらぼうめい! ただでさえクソあちいつてのにこの人だからだア、夏を鍋で煮込んだみてえだ。鈴なんか見て何が楽しいんだちくしょうめ!」

町人△

「鈴を見るじゃないよ、夕涼みのことさね。今日は花火だろう、あそこの^{さじぎ}敷で娘さんが並んで涼んでる。うちわをパタパタつて、風流だね。川開きはこつでなくちゃ!」

たがや

「てやんでい、べらぼうめい! 股開きだかなんだか知らねえが、そんなに暑けりや素っ裸で川に飛びこみゃいいじゃねえか。江戸っ子がまごろつこいとしてんじゃねえやこんちくしょう!」

町人△

「あんたはもつと風流を学んだほうがいいね。お、茶屋で旦那さんが団子を食べているよ。これまたうまそうに食べるもんだね。あそこからじゃ花火は見えないと思うが、花より団子つてところかね。はっはっは!」

たがや

「何が花より団子だべらぼうめい! 江戸っ子は穴よりマン!」だこんにやろつ。くそつ、すれ違ふ野郎どもの腑抜けたツラ見てたら腹が立ってしょうがねえ。やいフニヤチンど

も、アホ面で花火見上げてる暇があつたら、その茶屋に並んでるマンコの群れに突っ込んでみろい！ 派手に散つたらそいつが今夜の大玉でい！」

町人△

「たがさんは今が江戸だから許されてる節があるね。そうだ、今度のはちよいと特別なんだよ。なんでも花魁が見物に来るとか。しかも二人だ」

たがや

「おいらん？ 食いモンか？」

町人△

「違つよ、吉原からわざわざ」足労なさる。位が高い遊女の方々さ」

たがや

「おうつ、股開きじゃねえか！」

町人△

「たがやさん、今が江戸だから許されてるけどね…そんなわけで例年以上の人数がある。家には迂回して帰つたほうがいいね」

たがや

「てやんでい！ ウチに帰るつてのに、なんでよそ様に遠慮しなきゃなんねえ。オレあの両国橋の人だからをまつすぐに割つて行くぜ。おうつ、江戸っ子ならオレのケツみてえに潔く割れやがれい！」

町人△

「ダメだよたがやさん、往来で尻を振りかざしちゃ。おつと、たがやさん待つて。そつちは今大変だよ」

たがや

「止まれと言われて止まる奴あ江戸っ子じゃねえ！ おらおらおらおらあつ！」

むせかえるような人混みを抜けると、そこだけぽっかりまん丸に開けた両国橋の上でした。

しん、と風の前の静けさに、さしものたがやも尻をしまつ。

なんだなんだと見まわしますと、橋の両端から人ごみを割って歩いてくる女が二人。しゃらん。しゃらん。しゃらん。しゃらん。

共に別嬪でありました。

かぎや太夫^{だゆう}

「おーっほっほっほ！ たまやさん、くっさいくっさい田舎者があたくしたちの舞台に転がり込んできたのだわ！ 野暮な^{いもぢ}芋猿は処刑なのだわ！」

たまや太夫^{だゆう}

「うっふゝゝゝん♡ かぎやちゃん、物騒なのはダ・メ・よ♡ 今夜はアタシたちのショウタイム☆ とはいえ、お客様は大事にしなくちゃ♡」

たがや

「ひっこんでろすつとどこつこい、人の家路を邪魔しやがって。おうそこのちんちくりん、かぎやだかガキやだか知らねえが、周りのチンコとマンコ引き連れてどっか余所でやってくんねえか」

かぎや太夫

「なっ…！ あつたま来たのだわ！ 誰がちんちくりんで誰がガキですって！ あたくしはかぎや太夫、吉原で今いちばん勢いのある遊女なのだわ！ あたくしのチン嗅ぎに悶えない男はいないのだわ！ あたくしを知らないなんて、処刑確定の田舎者なのだわー！」

たがや

「てやんでい、しゃらくせえ喋り方しやがって。ぶりぶりかわいいぶってる暇があつたら町に出る前に目ヤニくらい取っつけ！」

かぎや太夫

「えっ、ウソ！ 鏡見たのにつ、ああっ、もうムカつくのだわ！ もうすぐ花火が始まっちゃうのに、この邪魔者！ 早くステージから降りるのだわ！ そもそも女だからマンチくりんなのだわー！」

たまや太夫

「かぎやちゃん、突っ込み所違つと思うわよゝん♡ ごめんネ田舎者さん♡ アタシたち、今から勝負をするところだったの。勝負に水を差すなんて、江戸っ子には無粋だと思わな〜い♡？」

たがや

「なんだ古くせえ喋り方しやがって。いつの時代の女だこんちくしょう」

たまや太夫

「江戸っ子に言われたかないわよ！ アタシはたまや太夫！ 玉舐めで右に出る者はいないと言われているわ。玉舐めこそ至高！ 玉舐めこそ人生よ！」

たがや

「あん？ 金玉はアレ、袋になってるけど中身は取り出せねえぞ？ 飴でも舐めとけ」

たまや太夫

「おやつじゃないのよー？ ちょ、こいつほんとバカ！ 救いようのないバカっ！ もうおだまり！」

いいこと？ アタシたちそれぞれ、花火師のたまやとかぎやの名を背負ってるでしょう。そこでとっておきの催し物を思い付いたの♡

川開きの花火を背に、この両国橋というランウェイの上を二人で歩くの。颯爽と夜風を切つて、オーディエンスの前でポーシング♡ バックにエレガントな花火がドン。シャワーのような歓声、火花のような喝采…♡

より大きな声援を得た方が勝ちってワケ♡ アタシたち、夜の女として美を高め合っために来たの♡」

かぎや太夫

「たまやの言つた通りなのだわ。さっさとどかないと痛い目見るのだわ。ちなみにあたくしの上客には、幕府のさる偉い方もいるのだわ。チン嗅ぎおねだりしたらあんたみたいな田舎者、一発で打首獄門うちくびくもんなのだわ！」

たがや

「お乳首菊門ちゅうびきくもん？ わけわかんねえ」と言つてんじゃねえやすつとこどつこい！ 幕府の猿によろしく言つとけい！」

かぎや太夫

「もう怒つたのだわ！ 幕府のことはバカにしてもあたくしをバカにする奴は許さないのだわゝゝっ！ 侍のおじさんたち、やってしまうのだわー！」

たがや

「かかつて来やがれ、火事とケンカは江戸の華つてなア！」

かぎや太夫の引きつれた十名余りの侍どもが、たがや目がけて躍り出ました。多勢に無勢、あえなくお縄につくかと思いきや、たがやの大立ち回りが始まりました。

拳と拳がぶつかり合う度、鼻血と折れた歯が飛び散り、もはや大乱闘の体を成しまして、花火見物の客も今や見世物に夢中。

「いけつ、そこだ！ 押さえろー！」

「なんだなんだ、盛り上がってんねえー！」

「やつちまえたがや！ 鼻もちならねえ侍どもをぶっ飛ばせー！」

「そつだやつちまえー!」

真剣を抜いた侍たち、たがやの氣迫に押されに押され、一人また一人と倒されていきます。

かぎ屋太夫

「こらゝゝつ! 頼りないにも程があるのだわ! 田舎のお猿さん一匹斬れないなんて、その刀は棒切れなのだわ!」

たがや

「棒切れどころかフニヤチンだぜばらばつめい! もつと腰入れて構えねえと、ケツ穴に力が入らねえぜ!」

たまや太夫

「あらやだ、まさかあの構え…待つてちょうだいかぎ屋ちゃん、そいつ危険よ! 下がきなさい!」

かぎ屋

「うっさいのだわ! おじさんたちが雑魚すぎるのが悪いのだわ! あたくしが直々に成敗してくれるのだわ! 無様なイキ顔晒しなさいなのだわゝゝ! きええええええい!」

たがや

「その意気だけは買つてやらあ! おらあ!」

かぎ屋

「んほおおおおおおつ♡!?! い、いくのだわゝゝ♡♡ おおおつ♡♡♡」

ひゅるるる……ドゥッ!

大輪の花火が照らしますは、かぎ屋太夫の大絶頂!

始まりました両国の川開き、江戸っ子どもが一斉に、よッ!

「かゝゝぎやゝゝゝゝ!」

たまや太夫

「フフ、フフフフ♡ その構え、見覚えがあると思ったら♡ かつて吉原を騒がせたメス斬り抜刀齋と同じ♡ 圧倒的な速さと手管で瞬く間にイカせる手技の名手♡ 失われた流派と聞いていたけれど、こんなところで会えるなんて、シビれるわあ♡」

たがや

「てやんでいべらばつめい! 何言つてつか全然わかんねえんだよ!」

たまや太夫

「かわいい顔でとぼけたって無駄よ〜ん♡ アタシ強い子には目がないの。その技は誰から学んだの!？」

たがや

「技だど？ こんなただの手マンでい」

たまや太夫

「ふざけないで！ あなたがかつて吉原を席卷した伝説の手技師だってことはわかってるのよ♡！ アタシ強い子が大好きなのよ〜！」

たがや

「手マンでいべらぼうめい！！ オレあただウチに帰って酒が飲みてえだけなのによー！！」

たまや太夫

「あなたの手技とアタシの舌技！ どちらが強いか！ いざ勝負ウウウー！！」

言うが早いかたまや太夫、懐から刀を抜いて斬りかかる。たがやも応じてノミを刃の如く構えて走る。

ドンっ！ と一輪夜空に轟き、辺り一面はあつと照らされて、二人の斬り結ぶ様が両国橋に鋭い影を落とした。満天の大輪のもと、負けず劣らず力強い火花が散ったのを誰もが見ていた。

さあさあこの騒々しい勝負の結末、最後に立っていたのはたがやだった！

膝から崩折れるたまや太夫、泡を吹きながら倒れ、辞世の一句。

(死にかけのように)

たまや太夫

「玉舐めや ああ、玉舐めや 玉舐めや…」

(二こまで)

ぱたりと倒れたところではゆるゆる、ドンッ！

「た〜まや〜〜〜！！！！」

花は散り際こそ美しい。江戸っ子は風情をようく分かっておりますから、この日ひときわ大きな歓声です。

ところがたがや、颯爽と人を割って歩き出すかと思えば立ち尽くしておりました。

見れば着物がはだけている。たまや太夫の一太刀が皮一枚切り裂いたのでしょう、大工仕事で薄汚れた半纏はんてんが落ちて、乙女の柔肌なつこが覗いておりました。

たがや、ナガラしを巻いた胸を必死に隠そうとしますが、花火玉はなびたまもかくやという二つのデカパイを隠そうにも、野次馬どもの好奇の目からは逃のがれられません。

(照れたように)

たがや

「み…見せもんじゃねえやい…」
(ここまで)

ひゅんぬんぬん…ドッ！……！

「た~~~~がや~~~~~~~~~~~~！……！」

江戸中に響き渡る、今宵いちばんの大歓声でございました。